



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | グローバリゼーションと民族主義   |
| Author(s)        | 櫻井, 義秀; Sakurai, Yoshihide  |
| Description      | 平成16年9月14日付け「聖教新聞」から  |
| Citation         | 聖教新聞  |
| Issue Date       | 2004-09-14  |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/887">https://hdl.handle.net/2115/887</a> |
| Type             | article   |
| File Information | s040906.pdf   |



## グローバリゼーションと民族主義

北海道大学大学院文学研究科 櫻井 義秀

### 1 絶望的な抵抗としてのテロ

2004年9月1日、北オセチア共和国でチェチェン解放を求める武装勢力に学校が占拠され、始業式に参加した生徒や家族千数百名が人質に取られた。3日、特殊部隊が突入し、6日現在で335人が亡くなり、なお行方不明者260人がいるという。

現在、イスラエル、イラク、ロシアでは自爆テロが頻発している。練達の兵士ではなく、使命感に燃えた青年や、絶望的な報復感情に囚われた未亡人が実行しているといわれる。そして、無差別テロよりも酷い、子供の殺戮が行われた。犠牲者や遺族、関係者の怒り、悲しみに言葉もない。

なぜ、人を絶望に陥れるテロはやまないのか。偏狭な政治的イデオロギーや宗教的信念に囚われてしまう人がいるからである。しかし、彼等がそのような情念に頼らなければ自己の尊厳を確保できないくらいに、政治への深い絶望があることも事実である。テロの背景には、1991年と99年の2回にわたるロシアのチェチェン侵攻があり、数万に及ぶ民間人を殺傷し、独立派との交渉を拒む強硬姿勢が指摘されている。しかし、だからといって手段を選ばない抵抗が正当化されるわけではない。「テロとの戦い」には際限のない報復合戦がみえている。

### 2 グローバリゼーションとナショナリズム

1990年代、世界は社会主義や福祉国家の理念を捨て、経済的繁栄をもたらす唯一のメカニズムとして、超大国アメリカが主導する資本主義経済に包含されていった。情報技術・金融システムの発展は、国家の思惑とは別に、一般市民の経済的基盤、生活様式や文化的嗜好まで世界標準に変えていく。ものを買う、所有することの欲求は文化的障壁をやすやすとこえた。インターネットの情報は、国家やマスメディアによる情報統制に風穴を開けた。世界中の他人と自分を比べられる環境の中で、多くの人が持っているものを持つようになりたいと願う。この消費欲こそ資本主義の活力であるが、グローバルな世界で成功するのは一握りの個人、企業、国家である。

西欧でもアジア諸国でも、新自由主義経済の時代に、社会階層の格差が増大している。グローバル化した経済において、企業は低廉な労賃や潜在的市場を求めて多国籍化するので、先進国では産業の空洞化が発生し、職に就けない若者が増大しつつある。産業が移転

された国家群では経済が離陸するのであるが、短期間の急激な経済成長では一握りの成功者と大量の低賃金労働者という格差が残ってしまう。産業移転を受けない国家群では、権力者が経済的富を国民や希少資源から得ようとし、内戦や地域紛争を繰り返し、さらに国力を減じているのが実態である。要するに、経済のグローバリズムは、富の一極集中と、庶民の相対的剥奪感と、強国が主張する自由経済の覇権主義に怒る人々を生み出す。

そして、中間層から中下層に地滑り的におちこんでいく階層が、国家に生活や自己の尊厳を保障してもらおうとする。そうした期待を背負った政治家が、保護主義的経済やナショナリズム的言辞により、雰囲気としての国民の共同性を演出する。これが先進国の現状であり、途上国では、国家に期待できない人達が、「民族」や「宗教」という共同性にすがろうとする。

### 3 個人、生命を尊重する理念と方策を

偉大なるものに所属することで自己の尊厳を確保しようという思想や行動は、偉大な理念のためには自分の命を捨て、他者の命を奪うことを命じる。

日本では歴史的経験をふまえて、個人の尊厳と民主的な社会関係が至高の価値とされた。しかし、昨今は、自己承認・自己実現だけに耽溺する個人と、日本という価値でアイデンティティ形成を図ろうとする政治的動きが極端に分化している。「ナンバーワンにならなくてもいいから、オンリーワン」といった歌や、世界の中心で愛を叫ぶという小説に、身近な他者以外の世界が見えない。他方、日本国、日本経済という看板以外に中身がない自己では、個人の確立がなされていない。

自己と世界との関係を冷静に見つめ、なお、他者の苦しみや悲しみを自己のものとするような感性や想像力をどのように生み出していけるか。人が絶望に陥らないための信頼をどのように構築していけるのだろうか。テロと宗教的過激主義が結びつけられることの多い今日、宗教的或いはスピリチュアルな経験と絆の可能性を信じる者たちは、この問いを正面から受けとめなければならないだろう。